

會日



報

1963年2月

225

日本山岳会

自然と人生

— 自然愛護についての感想 —

伊 藤 秀五郎

◇山の遭難激増

アンドレ・シエグフリードに「アメリカとは何か」という本がある。複雑な人種構成の分析を手がかりとして、アメリカ社会の断面を手際よく描いた文明論である。そんなむずかしい意味ではないが、このごろ、日本とはなんだろう、と考えることがある。

このところ毎年山での死者が一五〇人を下らない。日本は恵まれた山国だし、世界一を誇る歴大な登山人口からみれば、取るに足らないという見方もあるが、毎年一五〇人も山で死ぬ国はほかになら問題である。国をあげてという大げさだが、なんとかうまい防止策をと多くの人が知恵をしぼっても、けっきょく名案は見つからなかった。

こうして山の遭難は日常茶飯事となった感があるが、しかし遭難は山に限ったことではない。警察庁の調べによると、海や川での事故死が毎年二、〇〇〇人もあるというのである。海国男児という言葉があるくらいだから、これも

驚くことはないかもしれない。

◇事故の多い国

交通事故死にいたっては、三十七年度一、〇〇〇人、三十七年になっても減る傾向はなかった。すでに十一月で前年度の数に達している。

火事による焼死というのまばかにならない。一年間で八〇〇人を上まわるといふ。鉱山の事故も跡を絶たない。

そのうえ殺人というのがはやってる。これも年々増加の傾向をみせ、東京都二十三区での殺人は、二十四年に一七七人であったものが、三十四年度二〇七人、三十五年度一八八人、三十六年度二〇〇人となっている。全国では約二、〇〇〇人とみてよいであろう。推理小説の種にはとてかかないというわけである。山での一〇〇人や二〇〇人の遭難など無視できる数かもしれない。

戦前の統計では、自殺と他殺の人口に対する割合は、北欧と南欧では逆の関係になっていた。人口百万について、自殺者のほ

うは、デンマークが二〇九、スウェーデンが一七一、イギリスが一二八に対し、ポルトガル一一五、イタリア七八、ギリシア五七、スペイン三九であるが、殺害された人数は、デンマークの五、スウェーデンの九、イギリスの六に対しスペインが一六、イタリアは二二ポルトガルが二五、そしてギリシアの六三というのが最高であった。当時の日本は北欧型で、自殺者は二一二名であるが、殺害された人はわずか六名にすぎなかった。

戦後の各国の数字は知らないが現在の日本が自殺においても他殺においても世界有数の国であることは間違いない。他殺の数は戦前のイタリアやポルトガルに迫っている。いまだでは、これらの国でも殺人は戦前に比べてずっと減っていると思われるから、おそらく他殺も日本が最高であろう。

◇生命軽視の風潮

要するに現在のわが国では、憲法の精神とは逆に、生命や人権を軽視する風潮がきわめて強いというところである。生命を尊重するとか軽視するとかいう国民の精神的態度は、民族的特質というようなものではなくて、その国の経済状態、社会的安定度、教育水準、制度、法律、慣習、宗教的関心など

に左右される性質のものだ。だから、生命軽視の風潮を是正することもあるん不可能ではない。ただ、商業宣伝で商品売り込むようなわけにはいかないと、問題の困難さがある。

生命の直接の脅威ではないが、ひたたりや詐欺横領やニセ物作りの横行もひどいようだ。麻薬天国というのも日本の別名となっている。このようないわば国民の道義心の頹廢、精神生活の弛緩という現象と、登山道徳の低下や、自然を平気で荒しまくる無法行為とは、共通の土壌があるような気がする。両者を無理にこじつけて関係づける必要はないがまったく無関係とは思われない。

◇自然を損なうもの

都会のいざき、車の洪水、騒音、スモッグというような物理的圧力から逃れて、ときどき清浄な自然の空気を吸ってみようというのはいきわめてしぜんの要求だが、さてこのひとびとが山野に出かけると平気で美しい自然を傷ける。これは平仄の合わない論理である。虐げられたものの目的のない復讐、とでも解すべきかもしれない。目先の利益を追求する商業主義が、野放図にのさばって、原野といわず山岳といわず、風景のあ

William E. Sirt
(deputy leader, physiology)
Allen C. Auten (communication)
Barry C. Bishop
(NGS photographer)
John E. Breitenbach
Barry Corbet
David L. Dingman
Daniel E. Doody
(motion picture cameraman)
Richard M. Emerson (sociology)
Thomas F. Hornbein (oxygen)
Luther G. Jerstad
James T. Lester (psychology)
Maynard M. Miller (glaciology)
Richard Pownall
Gilbert Roberts
Lt. Col. James O.M. Roberts
(transport)
James Ramsey Ullman (writer)
William F. Unseald
(climbing leader)
James W. Whittaker

よくみるとこの中には色々の面で高名の人の名があるのがおわかりのことと思う。

資金集めには相当苦勞をしたらしいが、NGSからの可なりの寄付もあってどうやら実現の運びに到ったことはお目出たい。

全員の共同訓練は九月に十日間レイニア山で行われた。

スケジュールは左の通り。

全食糧裝備はシアトルから船出

(二一・二六) カルカタ着 (一・

一五)
先発隊(アルマン夫妻、D・ド
ウディ、ディレンフルト夫妻)は
(二・一二)キャリフォルニア出
発、空路カルカタ着(二・一八)
続いてビショップ夫妻がこれを追
う。
本隊は(二・三)サン・フラン
シスコ発、カトマンヅ着(二・
一五以前)
全隊(シエルバ三六名、低所苦
力五〇〇名を含む)カトマンヅ
発(二・二〇)
リオネル・テレイとアルバート
・エクラーの助言により、五月全
部を山頂攻撃にあてる。
サウス・コル到達予定(五・一)
因みに本遠征隊の諮問委員会メ
ンバーは左の通り。
George I. Bell
Dr. G.O. Dyhrenfurth
(professor Emeritus)
Albert Egler (leader of the 1956
Swiss Everest-Lhoise Expedi-
tion)
Melville Bell Grosvenor (President
and Editor, National Geographic
Society)
Sir John Hunt
Warren G. Magnuson(U.S Senator)
×
なお、ニュース七三号によると、一
九六四年までに返せばよかったAAC
からの借金一〇〇〇ドルを出発前に返
却してしまっていた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

I 昭和30年前後より北アルプスを中心として各医科大学によって山岳診療所が開設され年ごとに其の利用者は増加の傾向をたどって

理事を中心として富士山頂で診療所を開設し登山者のために便宜をはかって来ましたが各校共よりよい診療をそして登山医学研究のため連絡がとりあえたらという希望が募りおりよく山岳会加盟校が其の大部分を占めていたため本会研究部内に医療連絡会を置かせていただくこととなり現在山岳会を含め13組が集まっております。毎年春秋に会合を開き診療状況の報告研究をしております。登山医学のめんにについては連絡会として現在

以上

・自然と人生
・アメリカ山岳会のニューズより
・医療連絡会便り
・千客万来
・モリス・エルツォーグ氏の
来朝
◆山岳会事始め
◆図書紹介
◆欧州旅信
◆会員通信
◆湯西川のほとり
◆高原の国にて
◆橋本竜伍君を悼む
◆会務報告
◆東京支部報告
◆第一回冰雪技術講習会
◆第八回スキー講習会

③ 内科系では感冒、胃腸炎、頭痛、嘔吐等が中心をなしています。外科系では挫傷挫創が中心で関節炎も比較的多く見られています。

④ 開設期間は一定しておりませんが7月より8月末までが大部分です。

△医療連絡会加盟大学△

7	6	5
齒科	婦人科	皮膚科
科系	科系	科系
四七人	二一人	六八人

千・客・万・来

松方三郎

・M・エルツォーグ氏

エルツォーグ氏が日本に来るから食事に出てくるようにと案内をうけたとき、そのエルツォーグ氏が「青年とスポーツのオート・コミセール」だなどということは知らなかったが、あとでもらったフランス大使からの正式の案内状にはそう書いてあった。ただそういわれてもこの場合、そのハイ・コミッションナーが政府の役人の中でどんな地位にあるものか、門外漢のぼくにはよくわからない。まあアンナブルナのエルツォーグだということがわれわれの関心事なので、ほかのことはどうでもいいのだから、肩書の方はそのままにして、いわれた通り十二月の二十六日の午後フランス大使の公邸に出かけていった。

いつてからきいてみると、エルツォーグ氏の今回の訪日は、来るべきオリンピックに関連があるというところで、その方の与謝野事務局長なども一緒だった。フランスは、この次かそのまた次のオリンピックの候補地としてリオンを

しているとかいうので、日本の準備状況なども見ようというところで東京滞在の数日は忙しい毎日であつたらしい。大使館の館員三、四人それに奥さ



いに救われた。楨さんはじめ山の連中に会うのが、その最後の日の午餐会の目的の大きな部分を占めていたらしく、この次はもっとゆつくり山の話がしたいということだった。彼は両方の手の指が第一関節から先きないということはアンナブ

ルナも同席したので十何人かのテーブル、ぼくは大使の方の端にいたので食事中にははるかに彼をみる程度だったが、日高さんは彼の隣りだったから、山の話はもっぱらそっちの方に集中された。日高さんならフランス語で、お手上げなどという心配はなし、ぼくは大

ルナの紀行を読んだ人は知っていると思うが、驚くべきことはその手で上手にナイフもフォークもつかうし、字も書くのである。ぼくは彼の著書にサインを頼んで、そういつた瞬間、これはとんだことをいったと思ったのだったが、御当人は一向平気で、扉に大きくサ

左から 楨、日高、M. Herzog Dec 26, 1962 フランス大使公邸

インをしてくれたので、胸をなでおろした。

・韓国山岳会洪鐘仁氏

韓国山岳会の会長の洪鐘仁氏の訪問を受けたのは一月の半頃であつた。会の竹田君が韓国の山の人達に近頃大変親しくなっているの、洪さんもヨーロッパから帰国の途中、わざわざ声をかけていつて下さつたのだった。政治状況がいろいろと激しく揺れている韓国で、会長の洪さんは一切そうした渦に巻き込まれないようにと、細く気を配っているという話だったが、雷族の同類は韓国にもいるらしく、そうした連中に山登りの「いろは」をよく吞込ませるのに、苦心があるというように見受けた。ぼくは洪さんの気持に大いに同感して、忙しい中を大分引きとめて、いろいろ話をきかせてもらった。

・ディールンファース氏一行

エヴェレストに行くアメリカ速征隊の隊長ディールンファース氏一行が東京を通つていつたのも一月だった。ぼくたちにはディールンファースなんていうよりはディールンフルトとドイツ読みした方が親しみがあがるが、二代目のノーマン君はアメリカ籍なのでフルト

といわずファースといっているのだそう。今度のエヴェレストの遠征はアメリカとしてははじめての大部隊で登山の方ではエヴェレストとローツェ、ヌプツェを目ざしているが、そのほかに隊員一人一人が何かの分野での学術調査を行えるような人選で、そんなことから、アメリカのナショナル・ジオグラフィカル・ソサエティーと学術会議との財政的援助をうけているという話だった。東京には写真関係の装備をととのえるためによつたのだが、全員十八名に一人一個づつニコン・カメラを用意するのだということだった。先発隊は隊長ディールンファース夫妻、ビショップ夫妻にドゥーディー氏の五人だったが、女房も山に行くのかときいたら女連中はカトマンズにいて、連絡の仕事を担当するのだといっていた。

・ノエル・ベーカー氏

山に関係して来たお客ではなかったが、英国から二人の名士が十二月と一月とに現われた。ノエル・ベーカー氏の名前は新聞にも随分出たから来たことを知っている人は多いと思うが、この著名な政治家が、古くからの登山家であることを知る人は少いかも知れない。この年になってマッターホルンに登っていないのが残念だとい

っていたが、かつてはオリンピックで中距離の選手であり、閑僚として名を列ねたことも三回ある。そしてノーベル平和賞の受賞者でもあるが、山の話しになると切りがない。ことに日高さんは連盟時代からの知り合いだから、山の話題が多い。

・サー・ポール・シンカー氏

もう一人の英国からの客サー・ポール・シンカーは英国文化振興会の事務総長だが、この人も山登りの仲間である。今度は日本のブリティッシュ・カウンシルの十周年で来朝したのだが、山の話題は多い人だ。仕事の関係で海外旅行も多いらしいが、ある年には、一年にヒマラヤとアンデスとエルブルースの三つの山にいったといっていた。ブリティッシュ・カウンシルには登山部があるなんて初耳だといったら、とにかくぼくが歩くと各地のカウンシルの代表達は目方が減るんだといっていた。この次来たときには日本の山も是非登るんだと大変な元氣だったが、この人本職はギリシア・ラテンの古典学者である。但し「フーズ・フル」を見るとレクリエーションのところにちゃんと「クライミング・アンド・ウォーキング」と出ている。

一九五七年のA・C百年記念晩餐会では、ぼくは彼と同じ食卓だった。

・モーリス・エル

ツォーグ氏の来朝

フランス山岳会元会長のエルツォーグ氏が、青年およびスポーツ國務相（オー・コンミッセル）の資格で昨年十二月二十四日来朝した。用向きは東京オリンピックの準備状況視察が主であったようだ。

二十六日在京フランス大使館で催された午餐には、高石IOC委員はじめオリンピック関係者のほか、本会から横名誉会員、松方、日高新旧会長の三名が招かれた。エルツォーグ氏は高石、石井氏協理、竹田IOC委員長（川島オリンピック担当國務相と東IOC委員は欠席）に対しメリット・スポルチフの最高記章を授けた。これは戦後に制定されたもので、その授与資格は大へんむつかしく、すぐれた成績を示したスポーツマン



エルツォーグ氏のサイン「L' ANNAPURNA」の扉頁

ンか、運動界のために大きな功勞のあった人に限られているそうである。

横氏はマナスル写真集を、松方会長は本会の正副バッジと小旗ならびに最新刊の山岳と山日記を贈ったところ、ヒマラヤの写真をな

つかし気に眺め、山日記に多大の興味を示した（くわしい目次の仏訳をあとから送った）氏はアンナプルナ頂上で受けた凍傷のため左右とも手の親指を含めて全部第一関節から先を失っているのだが、器用にペンをはさんで、松方会長

がさし出したアンナプルナ登頂記にサインしていた。

山仲間のこととてすぐ親しくなり、四人の間で山の話しに大半の時を費した。氏は羽田に着くや否や新聞記者につかまり、山の話しばかり聞かれたのは驚いたと云っていた。食卓では高石氏と日高とを右左に控えて、オリンピックと山と半々に話し分け、日本の大会準備振りに信頼していると云い、フォスコ・マライニ君とは親しい仲で、いい登山家だとほめて、その在日を知っていたらこの席に来てもらう筈だったと惜しがり、明朝たつて帰るから、日本山岳会のお招きに応じられぬのは残念だが次の機会には是非ルームを訪ねると約束した。まことにいい人を迎えて、なごやかな集りであった。（日高記）

☆日本山岳会関西支部

訪華友好登山隊より

私達の遠征につきまして種々御高配を賜り御礼申し上げます。

二月十日無事台北着、当地の山岳関係の方々の盛大な歓迎を受けました。日中の気温は十四・五度、春のような感じですが、日本の梅雨に当っております。

二月十一日、静岡の佐野敏郎氏（二月二日大鵬尖山で負傷）を中

國空軍総医院にお見舞に行きました。元気で顔色もよく、二月十四日にキブス固定を行うそうです。

我々は十六日キャラバン、三月初め登頂（著濃溪―新高山）の予定ですが全くの未開拓ルートで前途の困難を予想しております。

出発ごあいさつ

日本山岳会静岡県支部

中華民国訪問親善登山隊

中華民国台湾省体育会山岳協会よりの招聘により、日本山岳会静岡県支部員にて、中華民国訪問親善登山隊を編成致しました。

出発準備には、静岡県、静岡県教育委員会の御後援を戴き、亦各メーカー、商社、機関並びに個人より多大の御支援を賜り、幸にも順調に出発準備完了出来ました事は、皆様方の御厚情の賜と厚く御礼申し上げます。一月二十二日神戸を、中国招商局の海欧丸（八〇〇〇トン）にて渡台致します。

現地に於ては、台湾省山岳協会員より選抜された隊員と合同にて新高山（三九五〇）次高山（三九三二）大鵬尖山（三五七三）ムトロップ（三七二五）北山（三七七〇）カラタタクン（三七〇二）等々の山へ登って参ります。

登山完了後は各方面を訪問、親善の実をあげて参ります。出発に当り、書面にて挨拶させて頂きま

一九六三年一月一日



山 岳 会 事 始 め

高野 鷹 蔵

今年（昭和三十七年）の初めに、会員広瀬氏からこんな手紙をもらいました。実

はその数日前に広瀬さんから電話で、本会の創立された頃の事実を質されたのですが折り悪しく風邪で臥床していたので、次の手紙が来たわけです。

□……山岳会の元祖

「前略、お手紙拝受しました。日本山岳会の創立の件ですが、『創立者七名で創立』と私は思っています。ところが武田氏は博物物の会が主になって登山家（小島鳥水、高頭仁兵衛氏ら）を呼びよせて、創立したものだから、武田氏が元祖だと言い張り、小島氏は生前私に、それは雑誌（採集紀行文集）を出版するために登山家を集めたもので、その席上、小島氏が英国山岳会になら

って、日本山岳会の創立を提案し七名が賛成して創立したから、小島氏が元祖だと主張していました。私はそれで武田氏が産婆役で小島氏が元祖と見ていますが、その見解で高野先生はいかがですか？」（原文の

まま）

この来状には何れ何らかの機会にお返事申上げますと、広瀬さんにお返事申上げてありますので、この一文を書く次第です。

これらの事柄は幾度も話題にのっていましたが、元祖争いは昔、上野黒門町に「黒焼屋」の元祖争いで二軒の店が間近にあったことがあり、福神漬にも元祖と始祖があり馬鹿らしくなりますが、山岳会の創立に参与した人々も既に、武田、山川両君と私とが残っただけとなりましたから、蒸し返しの話ですが書きます。

□……日本博物学同志会

「山岳」創刊号第一年第一号巻末に「日本博物学同志会規則」が載っています。その「第七条、博物に係アル特殊ノ事項ヲ研究スルコトヲ得」と言う項目があり、同じ頁に会告として、「本会々員ニシテ本会内、山岳会ノ正会員タルベキ者ハ同会費ヲ年額金八十五銭ニ低減サルルノ特典ヲ有ス」

……と言う一節があります。

「山岳会（後、日本山岳会と改称）が出来た頃のゆきさつは、本会の五十年記念の時おしゃべりをしたこともあり、時に話題にものぼりましたし、私自身は大正十二年の関東大震災で焼け出されたので、何一つ昔の記録などはありません、物覚えの悪い方ですから細かいことは記憶にも残りませんから、極く大づかみのことだけしか書けません。

前記の「日本博物学同志会」と言うものは、当時の「東京府立一中」に在学していた市河三喜、村松茂、村松操（後、東条操）小熊捍の四氏の発起によって誕生し、後に更に武田久吉氏も加わって創立された博物学研究の学生団体でありまして、隔月、のち毎月「博物の友」（日本山岳会の図書室にあります）を発刊していました。

私は当時、横浜在住でしたが、この会に加入していました。これらの会員は常に採集、観察旅行に各地の山岳地帯に旅をする人々が多く、自然とこの「博物の友」にも登山記事や紀行が多く掲載され、肝腎の学術的記文が圧縮されがちとなり、同会の幹部の間では、これでは山登り号でも、別に出版せねばならぬと言うことが議されていた。

□……小島鳥水氏と知る

同年何月と言う記憶はありませんが、あるとき武田君から、「その頃唯一の総合雑誌であった、博文館の『太陽』の第十巻第三号に甲斐の白峰という紀文を小島鳥水と言う人が書いているが、聞くところでは小

島という人は横浜の人だと言うが、どういう人だか、君（高野）は横浜だから調べてくれないか」と言う話を持ち出されました。心当りを聞いてみても、未だ吾々は社会人ではありませんし、なかなかわかりませんでした。私の旧知の「山崎小三」という横浜の戸部の地主さん（つまり資産家）の息子がいました。この人は後年「紫紅」というペンネームで劇作家として名をなした人ですが、

ある時この人と偶然途上で会いました。「小島鳥水という人を知らないか」と聞いてみました。それはよく（山崎）の友人で、君の家の近くの横浜正金銀行に勤めている人だ」と直ぐとわかりました。そのころ私は横浜市本町に住んでおりましたが正金銀行は当時唯一の外国為替銀行であり私の家からは一丁くらい（十一メートル）の所にありました。

□……鳥水宅訪問

それで、この山崎さんの紹介で小島さんを武田君と二人で、その自宅に訪ねました。多分明治三十八年（一九〇五年）の初めと思います。冬のしづれた、ある寒い日でありました。小島さんは其頃、戸部の税関官舎（横浜税関の官舎団地）の直ぐ近くの丘の上の家で、通された二階の部屋から硝子戸越しに、神奈川の高島山の辺が見えていた記憶があります。多分一月か二月の頃で

あったと思います。小島さんは風邪を引いて臥ていましたが、快く吾々に会ってくれました。

そのときに小島さんは富士山の話をして

「富士山に行きましたが、ハクモVに三色（イロ）もありましてね……」と語気を強めて話されるので、私も、武田君も、所謂（いわゆる）博物学づいている若者ですから、心中大いに小島さんの生物学者に驚いたわけですが、よく聞いてみると、「クモ」は「雲」で、「蜘蛛」ではなかった——のでした。

□……七人の同志

そのとき、博物学同志会の話もして、定期の雑誌刊行の話もしましたし「登山号」別刊の気持なども話題に上ったわけです。そのとき小島さんの話には「世には変わった人もあるもので、志賀重昂さんの紹介で自分（小島）のところに山の記録を集めた原稿を持ち込んできて、校閲をしてくれと言う人がある。その原稿は、このくらいの高さ」と言って、小島さんの座よりも高く手で示しました。

それは、高頭さんの「日本山嶽志」を言うので、その稿本を小島さんのところに持ち込んだわけです。そのときに話題であるか、その後に起った話し合いであるかは覚えてませんが、博物学同志会で「山岳号」を出そうという考えがあるなら、山好きの者どもが集まってやったらどうであろう、それには何か「会」でも作ったらどうだ、と言う話が、小島さんや、われわれとのあいだに自然発生的に起きてきました。それには「山嶽誌」を作ろうとしている高頭さんにも参加してもらったという提案になり、最初は明治三十

八年（一九〇五年）七月七日、河田黙君（今の山川君）梅沢親光君と私とで、当時本郷西片町に仮寓していた高頭さんを訪ねました。

こういうような、ゆきさつで、山岳会が出来たのです。つまりは、「日本博物同志会」を起因とする武田、梅沢、山川の諸君と私という一団と、作家ともいべき小島さん、それに山嶽志の著者である高頭さんという三つの素因が、偶然のことで集まり合っ出来たもので、最後に小島さんの希望で、大人株の城さんが武田君の勧誘で加わって七人となったわけです。

城さんは、当時の高山植物愛好家として武田さんとは年来的の交誼があったわけで、その当初には日本博物学同志会というものが団体であり、小島さんも高頭さんも個人という資格だったとも言えます。そこである話しの話し合いの末、とにかく日本博物学同志会の中に一つ別格の集いを作ろうではないか、と言う話し合いとなり、当初に書いたとおり、日本博物学同志会の会則に書いてあるとおり会の中に一支会を置くということになったのです。

事実すべての仕事は同志会とは別個であり、事務所も城さんの法律事務所の中に置かれましたし、仕事はそれぞれ分担して働きましたから、山岳会は独立した別の会ということになります。

□……「山岳」第一号を出すまで

そのうちに同志会は幹部会員が追々成長

するにつれて、だんだん分散してしまい、自然的に消滅してしまいましたので、自づと山岳会だけが独立して発達したのです。世に言う庇を貸して母屋を取られたように見えますが、実質的には当初から別々の成り立であったのです。ですから誰かが先祖でも、元祖でもなく、三つの要素が凝集して自然発生的に会が成り立ったわけですが、人の数から言えば同志会側が多く、山の雑誌を出そうという計画からすれば同志会側が先行していたわけですから、いろいろと話し合いの末、日本博物同志会の中に、一先ず、「山岳会」（後に日本の二字を冠す）を置いたという次第です。

小島さんはそのころ、「文庫」という雑誌の編集をしていましたから、あるいは山の雑誌を出すくらいの考えがあったかも知れませんが、私は聞いてはいませんでした。従って「山岳」第一号を出すについては、当初武田さんのお宅に集まって会議をしたのですが、席上雑誌の体裁や、何かと雑誌としての行き方などは、小島さんの知識と経験に大いに啓発されたものです。

× × ×

われわれ（武田君と私）が初めてウェストン師にお会いしたのは、山岳会を作ろうではないかときめた後のことで、英国山岳会の内容を知ったのはその後でありますから、山岳会創立の当初から英国山岳会をお手本にしたわけではありません。

再言すれば、小島さんという山岳作家を中核として、高頭さんと日本博物学同志会の武田、高野等が凝集して後に山岳会が

創立されたもので、時間的に誰かが先登かと言うには、むずかしい点もあるかも知れません。ヒマラヤの初登頂は唯一人の力で出来るものではなく、集団の力と同じと思いますが、この一文は一応、武田君にも目を通しておいりました。

（昭和三十七年十二月）

△武田追記V——広瀬氏が高野君に送ったという書面の中で、「山岳会は博物の会（日本博物学同志会の意味であろう）が主になって登山家を呼び寄せて創立したものだから、武田氏が元祖だと言いつ張り……」とあるが、この簡単な文句では、何時何処で誰にということとははっきりしないが、広瀬氏の間に対して私がそう主張したとしか受取れない。

山岳会の創立については「山岳」第四号第一号に載っている私の講演筆記を見れば、その当時の経緯が誰にでも判る筈で、広瀬氏に斯様な質問を吐かせる必要はないのである。（但し、同山岳14頁第二行の「明治三十六年七月」とあるは「三十三年八月」の誤字です）

広瀬氏は一九二五年九月入会とあるからには、上記の「山岳」の配布を受けている筈であるのに、斯様な質問を提出するとは、質問の意図がどこにあるのか納得がいかない。

私は、広瀬氏から山岳会の創立について質問された記憶もないし、加之、「元祖だと言いつ張り」のような馬鹿げたことをする筈もない。



茨木猪之吉

図書紹介

西のかた玉門関を出で、ハミからウルムチに向う。法顯、宋雲玄奘など、高僧が道しるべをなし、北川桃雄氏が戦後自動車の旅を語る。敦煌ではスタイン、ペリオの碩学に伍して、わが橘瑞超青年が考古

シルク・ロード

深田久彌 著

新書版二百ページの限られた紙面のなかに、長安(西安)からカシウガルまでの長い道中を、昔から今まで大ぜい先駆者の道づれをつけて、荒涼たる沙漠や、無人の広野やそばみち、花咲きくだもの実るオアシスや、変幻する湖水の間をたどって、古い都の跡や、人と獣がひしめく露天市や、新しいふきに生き返ろうとする都会をたずね、その間に折連山からボクト・ウーラ、ムスタグ・アータやポピエダ峯まで、氷雪の高峯を指さしながら、読者を引きまわして、巻を描くまで飽きさせない著者の筆は心にくいばかり、手に入ったものである。

漢の鳴騶の往復十三年にわたる西域行によって、東西交渉史に眼を開かれた読者は長安をたつて、

その間百年前ロシア人のブルジエヴァルスキーと五十年前大毎記者竹内翠村を拉し来って、張家口からクローン(ウラン・バートル)まで、外蒙の旅を紹介する。ハミからはヤングハズバンドのほカル・コックやヘディンがあらわれ、イギリス記者ダヴィッドスは戦後の現状を説明し、トルファンからウルムチまでは主として

大谷探検隊の、橘、野村、吉川氏等に導かれ、日野少佐や戦後おとずれた草野心平氏も登場する。トルファンから天山南路をカシウガルにいたる難路は、ヤングハズバンドいらいの人々が行き悩んだところ、途中のロブ・ノールを「さまよう湖」と断定したヘディンが、そこに見出した柵におさまる「沙漠の王女」のミイラの話はロマンチックである。クチャ附近では大谷探検隊の発掘をしのび、アクスで天山の雄峯を右に仰いでカシウガルに着く。法顯、玄奘の記述を援いた後マルコ・ポーロの記事を以て、深田さんは旅路のわりを結んでいる。帰りは玄奘、マルコ・ポーロ、スタインの足跡をふんで、タクラマカン沙漠の南辺をかすめて敦煌へと辿って行く。読むうちに、昔の「西域」のイメージが眼にうかぶと共に、たくましく苛惜ない開発による今日の「辺疆」の変貌を思いやうって一抹のノスタルジーを感じさせられるまことに楽しくおもしろい本である。

東洋史学者の長沢和俊氏えらぶところの写真には珍らしいものがあり、挿入の地図は読者の理解を助ける。(日高信六郎)

新書版、本文二〇九頁、附図一葉、本文中挿入写真及び略図多数、一九六二年十一月十日角川書店発行、二〇〇円。

☆☆☆☆☆欧州旅信☆☆☆☆☆

☆

☆☆☆☆☆近藤 等☆☆☆☆☆

日本の遠征熱はフランスでもみな驚いており、日本人はなんて金持なんだろうと不思議がつております。

ジャーヌーは報告の写真でみるとさすがにむずかしそうで、隊員のデメゾンも今夏二週間一緒にザイルを組むことができたので、色々話を聞くことができました。

フランスは次の目標として、どこをやるかは決めてないようです。資金はエルゾーグが文部省のスポーツ局長官をやっているのので、政府の援助はかなり出るようですが、民間の寄附、新聞後援はもうのぞめない状態のようです。

「テレイ」はジャーヌーより帰ってから今夏ペルー・アンデスのチャクララフにギド・マニヨヌたちと出かけその東峰を初登攀しましたが、非常にむずかしいピークだったらしく、固定ザイルをすっかり張り

めぐらしたようです。チャクララフをすまし、一たん帰国、またすぐにアンナプルナの隣りのニルギリにオランダ隊を連れて出かけ、初登に成功しました。真によく動く男であります。

彼の新著「無益なものの征服者たち」は、文学的香気はレビュファの本に及びませんが、読物としては大変面白いものでした。レビュファは相変わらず元気で、彼の新著「天地のあわい」は来春日本版を出版します。すばらしい写真集です。同名の映画はヨーロッパ全国ですばらしい評判で、アルパイン・クラブの会合で上映したときには、はじめて御婦人たちが列席を許されたそうです。この映画を持参して六四年に再度日本を訪れることを彼は希望しております。

フランコ氏はすっかり山登りからは遠ざかり、もっぱら国立登山スキー学校の校長として、下界でいそがしい思いをしておられます。今夏は、一九一一年からはじめてだ、という珍らしい晴天に恵まれ、アルプスをたんのうできた私の印象を申しますと、まずこちらの山登りは技術方面からみると、多くのフランスの山の映画が日本に輸入され、日本で思っているように、人工登攀ばかりやっているのでは、決してないということ

大阪市大ランタン・

リルン遠征報告書

大阪市大ヒマラヤ委員会編

一九六一年五月、ランタン・リルン遠征を行なった大阪市大登山隊の報告書である。五月十一日、ランタン・リルンの頂上を目前にして森本隊長、大島隊員、およびサード、ガルツェンの三氏が雪崩にあい死去するという日本のヒマラヤ登山隊最初の痛ましいアクシデントにあった報告書だけに一読に備する。

内容は事故発生までに至る行動記録を中心に、事故発生報告、事故の原因について、事後対策と処理、救援隊派遣、三氏の追悼を主としており、読むものの胸をえぐる。

雪崩が発生する直前、ガルツェンのみいち早くこれを感じていたという報告も注目を引いた。すなわち遭遇した雪崩のおこる数分前、ガルツェンは風のはためきでこれを感じ、横に寝ていたミンマ・ツェリンを起し、ベンチレータから外を觀察させた。ミンマは觀察したところ危険性のないことをガルツェンに伝えた。数分後爆風が襲来したとき、ガルツェンのみ寝袋から出て外部を觀察しようと起き上ったが雪崩が瞬時に来襲したため天幕より脱出できず事故にあった。事故当時全員寝袋に入っていたが、彼のみ寝袋から

らでていたことがこれを裏付けている、と報告されている。

救援活動もてきぱきと筋を立てて行動されたことが克明に述べられているが、それだけに関係者の苦労は大へんなものであったことがよくわかる。

巨大なアイス・ブロックの崩壊によるヒマラヤの氷雪崩の恐ろしさが、まさまざとしのぼれる。

(山崎安治)

昭和三十七年八月大阪市大ヒマラヤ遠征委員会発行、一四三ページ非売品。

蔵王五十年の歩み

一九六二年版

伊東 五郎 編

表紙のジャケットに編者伊東氏の扮装した珍らしい一本杖スキーの姿が色刷されているが、これが全篇の内容を暗示している。言うならば「蔵王五十年の歩み」は、そのまま本邦スキー五十年の歩みにも通じると言えよう。

内容は、沿革史として播磨期の蔵王(明治四十四年より昭和二年まで)・青年の蔵王(昭和三年より昭和二十四年まで)・世界の蔵王(昭和二十五年より三十七年まで)に時代分けして述べられ、そのあとに蔵王遭難史、蔵王の文化史、蔵王の自然界とが各々独立した章としてつく。

播磨期のはじめは明治四十四年高田市におけるレルヒの第一回スキー講習に山形師範学校の目黒乙次郎氏が参加したことから筆を起しているが、蔵王山でスキーが行われたのは一九一四年

(大正三年)一月二十二日、杯湖畔での岡崎三郎氏の初滑りが最初であることがわかる。

それから間もなく同年二月十五日には山形連隊の村井太郎中尉、山形師範の教員黒田毅、神山峯吉、八木藤次郎五十嵐竹次郎の五氏がスキーによる熊野岳登頂に成功している。山形市にスキーが入ってから三年目のことである。

編者伊東氏は大正六年いらい高湯小学校長、堀田村助役などを歴任された人、文字通り五十年の歩みをとま歩んだわけで、蔵王が雪の蔵王として開けていく発展の跡を記録をもとに忠実に述べている。

例えば一本杖が両杖に代ったのは一九二四年(大正十三年)で、同じ年三月十九日には横有恒氏が峨々から蔵王越えをして高湯に到着している。

ゴーボルトヒュッテ建設が一九二八年(昭和三年)、麻生武治氏のスキー指導が一九二九年(昭和四年)、アーノルド・フランク撮影隊が来たのが一九三六年(昭和十一年)である。

沿革史につづく遭難史、文化史、自然界の各章は専門の筆者を得て興味深い。遭難年表、温泉史年表、噴火年表など好資料を収めている。本書のように地方で出版されたものは他の地方では入手困難なことが多いが、その点もつとPRされてよい。

B6版、昭和37年12月15日発行、山形市蔵王温泉公民館内、山形市蔵王クラブ、二八七頁、巻頭写真十二葉、本文挿入写真 図版多数。

× × × × × ×

す。日本の山のようにやたらにハーケンがべたべた打ってあるようなところはまったくありません。

打ってあるところは絶対といってよいほど必要などころなので、グレンに例をとってみて、これが日本にあったらハーケンだらけになっているでしょう。自由登攀で登れるところは、あくまでもハーケンを使わずに登り、どうしても登れないところだけハーケンを打つというのがこちらの方法でありハーケンを打ちたさに決して登っているのではないようです。

テレビの映画で有名になったグラン・カピュサンの東壁にはたしかに二百本以上のハーケンが打ってありますが、これが日本だったら四百本になるでしょう。二百本打ってあっても、今夏レビュファ

が登ったときでも一晩ビバークしているのですから、ルートとしては非常にむずかしいのです。

むずかしいルートといえば、今夏ほどグランド・ジョラスの北壁のコンディションがよく、従ってよく登られた年はありません。昨年までで25登だったものが、今夏だけで22回登られたのですから。

そして九月一日の晴天を利用して、フランス人のガイド二組、スイスの一組、計三組がついにピバークなしでこの標高差千六百米の

大岩壁を登ってしまいました。

そのうち一番タイムの短かいのは、十三時間という驚異的なものです。一方スイスではマッターホルン北壁が第21登を迎えました。

アイガーの北壁は昨年までで23登だったのが今夏だけで14登を加えました。

ランベールと一昔前にグランド・ジョラスの中央バットレスを登って名を上げたルルー・ブラーズ夫人は、もう相当な年と思えますが、七月二十六日から三十日にかけてアタックしましたが惜しいことに成功しませんでした。なお単独登攀をくわだてたスイスとオーストリーのガイド二名が墜落し、他に二名、計四名の犠牲が出てお

ります。

登山者について感じましたことは、確かに若い人は多いですが、日本よりも中年すぎの人が非常に多いということで、そういう人はガイドを連れて、本当に山を楽しんでいるという感じを受けました。

私も明後日より Zermatt に出かけ雪のクリスマスを楽しむまいります。今冬は日本は例年にない寒さとか、御身御自愛のほどを祈り上げます。

(在パリ、十二月十日付、三田 幸夫あて)

— 393 —



茨木猪之吉

会員通信

見山峠へと向う。私一人誰も後から来ない。程なく黒沢を渡りつづいて、真川に出る、ここには橋がないので、靴を脱いで徒渉する。水が冷く足が

痛くなる。

笹ヶ峰牧場より 小谷温泉へ

谷本 弘

十月十六日朝、田口駅より八時二十分発の笹ヶ峰牧場行に乗る。杉の沢部落を過ぎると、ゲンゲン登りにかかる、高度を増すにつれて、野尻湖が見え出し、四阿、猫、笠、横手、岩菅などがつづいて見える。

やがて牧場へと緩い下りになり一時間で着く、高田営林署の作業詰所と京大ヒュッテと山小屋が一軒あるだけで、妙高、火打、焼、地蔵、黒姫などの二、〇〇〇米級の山々に囲まれた、全く素晴らしい牧場だ。紅葉黄葉は今が盛りで、火打、焼が数日前に降った雪で、白銀に輝き、色彩の妙は格別だ。バスから下りたハイカー連中も附近を散策、私もこの牧場でゆっくりしたかったが先を急ぐので、乙

ネパール便り

鳴原 啓佑

先日機会を得て憧れのカトマンズに行ってきた。しかし中印国境紛争で印度航空が欠航となるというので、予定を切り上げて僅か一日しか滞在できず残念でした。しかし往復の機中より貴兄らが活躍したマナスル、ヒマルチュリをはじめ本や写真で知っている山々が間近に見えた時は感激でした。

往きの機中では「チベット七年」で有名なペーター、アウフシュナイダーと偶然乗り合わせて、ナンダデビー、ナンダゴットからカトマンズ迄、山々の説明を聞く機会を得たのは全く偶然とはいえずキーでした。

神原氏にも御世話になりました。会の皆様に宜しくお伝え下さい。

(十月三日付ニューデリーにて松田宛)

野呂川の開発道路

日高 信六郎

十二月十一日、甲府からジープで広河原に往復しました。百瀬舜太郎氏同行、県の観光課の人と夜叉神峠トンネルをぬけ広河原まであたりの様子はすっかりかわり

湯西川のほとり

枯木山と明神岳

小野 幸

このあいだ、ひさしぶりに日本橋Mデパートの観光展で湯西川の宿の主人、伴さんにおあいした。その時、このごろ栗山のまわりの山はどうですか、ときいたら、ふもとのトラク道はずいぶんひらけました、山は相かわらず静かなものですよ、それにしても、すこしはハイキングコースぐらいはつけないと村でも考えています、がねえ、と彼は部落長の名に聞いて、つけたす言葉も忘れなかった。

ここ奥日光の栗山の村々もこの十年ほどの中にはなんとなくひらけてしまった。五十里(いかり)のダムはできるし、湯西川や川俣までのバスも、今では川治から日に七、八回ずつは往復するしまつである。山の僻地の代表的な存在として、かつては奥日光では栗山があげられていた。古い「日光山志」という本には「栗山の郷。十ヶ村、塩谷郡なり。西川、日向、湯西川、土呂部、黒部、上栗山、下栗山、野門、川俣、川治などの村なり。村居の開けたる年時も知るべからず、いたって山中の村居なれば、畠地とてもわずかに岩石の間をうがって作れるゆえ、みるこことすくなく、ために」山中に入ると鳥獣をとったり、木をひいたりして生活をたてている、とあ

る。これは百年以上前の話なのであるが、今に語られている話にも「栗山の人が東京見物に行つて洋傘屋が洋傘を売っているのをめずらしげに見て、これは何にするものかね、と聞くと、雨のふる日にさして歩くとなれないのです、と言うのでありがたく思つて買つたが、ずぶぬれにぬれてしまった、と言う。どうしたのかと思つたら、その人は洋傘を刀のように腰にさして歩いたためであった。こんな話ばかり集めて栃木県の方賀土俗研究会では「栗山の話」として一冊の本を出している、伴部落長殿に見るとしかられそうな書物である。

戦後、わたくしはこの栗山部落のさいはての山を二度ほど歩いて見た。それにこれらの山頂は今でもほとんどかわっていないということでもあるので、回顧録をノットしてみようと思う。地図は五万分の一の「川治」、山は湯西川温泉を中心に北の枯木山(一七五五米)と明神岳(一五九四米)の二つの山である。

×

枯木山(かきぎさん)へは昭和二十五年十月に登っている。この頃、湯西川温泉に入るのには鬼怒川から会津の田島行のバスにのって五十里の関門で下車、それより徒歩で湯西川にそってのぼるわけである。そのバスも一日に二回しか出ないものであった。五十里のダムも、やっと工事がはじめる頃であった。関門にバスをおりて、男鹿川を

これからも大いに変るでしょう。

帰りは十月に出来たばかりの野呂川沿いの電源道路をウネ／＼と川に沿って下り、奈良田から西山温泉、新倉、早川橋、鵜沢とまわり、十五夜の月を富士川の上に泛べて六時ごろ甲府に帰着しました奥の方はまだ非公開です。

台風で奈良田附近は二十五米も砂岩で埋まり、かつての村は無くなり、上手に再生していました。いい天気、白峰、朝与などきれいでした。

早池峰山

原田之幹

昨年の夏、秋田駒の頂上で、早池峰山からまわって来られた神谷恭氏の一行に、偶然、お目にかかりました。その時、同氏から早池峰山のハヤチネウスユキソウの見事だったことをお聞きしたので、ぜひ、私も登りたいと思い、八月上旬に単独でまいりました。

東北本線の石鳥谷駅から早池峰神社のすぐ近くまでバスの便があり、ほとんど歩かずに神社に着きます。シーズン中でしたが、バスから降りた登山者は数人にすぎず早池峰神社の境内はひっそりとしていました。その日は社務所に泊めてもらいました。夕食後、お風呂の湯につかって外を眺めると、

ホテルがとんでいました。

次の日は早朝起きて、暁の明星の輝やくなかを歩きました。河原坊からコメガモリ沢に入ると、道は急な登りになります。コメガモリ沢出合から早池峰山頂まで番号入りの指導標が百個もあるので、どんな濃霧のときでも、まず、迷うことなく頂上に達せられるでしょう。山頂近くの南側斜面には、とても見事なハヤチネウスユキソウの群落が見られました。白い毛を被った上部の葉が放射状に付いた形は、本邦のウスユキソウ属のうち、もっとも星形に近いと思います。また、生育の状態もきわめて良好で、近年、特別天然記念物に指定されたそうです。ナンブトラノオやミヤマアヅマギクなどは少し盛りを過ぎていましたが山頂の北側の岩陰に珍しくミヤマオダマキが紫の花をつけていました。

山頂の巨大な岩塊は秩父長瀨のそれと同種の岩石のように思われました。その日の天気は、まっ青に晴れわたり遠くの山々まで眺められました。鳥海山が、ひととき高くちやうど、初夏の富士山のような残雪を輝かせていました。下山は北側斜面を下って山田線平津戸駅に出ました。平津戸寄りの材木沢コース（指導標あり）をとりました。（三十七年八月）

☆短歌

小林 智明

昭和三十五年春五月、越後六日町から下津川山に入り、小穂口沢を下り奥利根湯の花へと旅をした。

三國川廻行

おりたての葉をもてゆけとたまはるる群地の里をふりかりつつ雪だにははかにまがり釜底の地鳴りつたへてゆれるまんさくぶあつくもたにを埋めし雪溪のしりへにねにけり三國川おく

石楠花のあつきみどり葉うちたつききふりしきる下津川山

小穂口沢をくだり利根本流に出る。

いちにちを雨にそぼれて雪の上にいねる夕べをうちなげきつつやうやくに雨あがりけり泊り場の朝けの煙のむらさきにして上州の熊おひびとの鉦目見え越後のそれもまじりみゆなりたに雪のきれめにはしる雪代の水勢に利根は春たけるらしゆく水のますますゆたかに流るるを湯の花かしと思ふうれしさ

湯の花温泉

露天湯に身をよこたへば湯の熱のしみとほるかやこの大き岩

土橋で渡り、いよいよ湯西川の流れにしたがってのぼるのである。途中でこの先の部落の西川の阿部五平さんという人と道づれになり、沢や山の地名をたずねる。この人に、先の部落の二ツ石に斎藤彦五郎さんというもの知りがいるとおしえられて、この人にも会ってこの辺の話をきいた。斎藤さんは七十二才とかその夜は湯西川温泉の伴久どまり。

その翌日は十月二十三日で、湯西川の朝は寒いくらいであったことをおぼえている。日記帳を見てみよう。

「朝は雨であったが、あがったので枯木山に向う。湯西川部落の奥の花輪から水場のところを山にのぼると急坂となり、高手からの尾根に出、なおのほれば一〇七三米峰の尾根に出、それより尾根の北側をたどり、枯木の尾根に出る。突起を一つ越すと鳥小屋で、高い棒が十数本立っている。又、一突起を越すと捕鳥場で棒が立っている。この辺から歩きにくく、笹がひどい。ときどき枯木山の頂が見える。荒海山ががいさいながら雄大に見える。頭のかかるくなつた頂上近くで雪がふってきた。時計も持たず、尾根を歩きにくいので湯の花温泉に降りるのをやめて、山頂より小雪の中を湯西川に、もときたおともどる。花輪部落の上の山の神で陽が落ちてまいった。」

その時に持参した地図の裏には鉛筆で「枯木山頂、岩かがみ、石楠花、笹、これが頂上付近のさま」とあり、この日は湯西川を午前

十時に出発して、午後六時半帰着とある。なお、翌日の帰路は平沢部落より湯坂峠（一〇七五米）を越して芹沢にくだり、五十里の部落まで歩いている。この峠は湯西川へ行く旧道であった。この朝は伴久を八時半に出ている。平沢から途中までトラック道があり、湯坂峠に立てば昨日の枯木山は見えないが、いかかわらず荒海山が二つあり、新しい細木のベンチが二つあり、すこし先に道祖神の石があり、裏に天保十年、施主、伴久左衛門、阿久津勘四郎と刻してある。芹沢にくだればトラック道となり、入りの村の横峰、中村、河合の部落をすぎて、男鹿川の会津街道に出る。そのまほうんざりする道を五十里まで歩いて、バスの人となった。

×

鬼怒川と湯西川にかこまれる明神岳にのぼったのは昭和二十六年八月五日であった。この山は地図を見てもわかるように頂上は二峰にわかれていて、南峰が三角点のある「日向（ひなた）明神」で、北峰が「裏明神」とよばれている。湯西川の伴久が出たのが八時半、ここから明神岳へのぼるには、まず湯西川の支流、前沢へ出なければならぬ。さいわい地図にもつけられてある、流れの南岸尾根、一〇二一M峰の東の沢に耕作道があり、山神峠という乗越を越せば前沢に降りられるのである。これよりすこし流れを降りて、直接明神の北西の尾根にとりつこうとしたが滝があったので、すこし上流にのぼることにする。大きな蛇が

流れを横ぎる。地図で見ると流
がい感でやと前沢の支流、滝
倉沢出合につく。地図で明神岳
面の谷で、その西側の三角点に
つく本流と滝倉沢を分ける尾根は
コシゴエのソネと呼ぶとか。

滝倉沢をしばらくのぼって滝を
まくと小道を発見、それについて
行く。左の小沢の左尾根にとり
つく。すぐ道は消えたのでナタ目
をつけながらのぼり、やとと明神
からの尾根に出た。たん雨がふつ
きた。いそいでこの尾根をのぼ
と東から尾根に合し、丈高い草を
分けて裏明神岳に立つことがで
きた。小雨で何も見えない。ここは
塚状をして、大木があるだけで祠
などはない。こまで湯
西川の宿から五時間しかかっ
て、午後一時半着。この先の日向
明神には祠もあり、途中には小池
もある。雨でぬれぬれ、この雨で
かす、今きたコースをもどるこ
とにする。前沢に降りたらドシャ
降りとなって、そのまま宿までド
シャ君に送ってもらった次第。頂
上出発午後二時十分、湯西川着が
五時四十五分であった。今ではこ
の前沢にもトラック道がついてい
る。

どうもこの辺の山々は、やぶこ
ぎが多くてこまってしまうが、こ
の栗山や南会津の山々には、岩だ
けのたのしさあり、いたるところ
に小池がたくさんあったり、笹が
やたらに生えたり、ふさいだりし
てくれるのが、この地方のよさとい
うのかも知れない。(三七・九・九)

高原の国にて

森 谷 虎 彦

イランの主都テヘランはエルブ
ー山脈の麓にある高原の街で標
高一、二〇〇メートルの美しい街
でした。十月も中旬になるともう
真白になります。四、〇〇〇メー
トル以上の高峰が続き、殊に主峯
デマバンド山は標高五七七一メー
トルで富士山型の美しい山容をし
た山です。調査団の一員として来
ているので勝手に登山を試みる訳
にもゆかないが、地質家の有難さ
で、調査にかこつけて結構山を楽
しんで参りました。然し土地の人
達にエルブーには狼が居るから
単独行はするなとやかされて止
むなく専ら峠路を歩いて来まし
た。十月半ばになると峠路も二、
五〇〇メートル迄雪線が下って来
ます。エルブー山脈の南側には
山に天然樹林は全くない。赤褐色
の山はだがむき出しなので私達地
質調査を担当する者に取っては全
く有難い訳です。然し、一度山脈
を越してカスピ海側に行くとその
景観は日本の東海地方と殆ど同
じ様で十月下旬にオレンデが美し
い色をして実っていました。

エルブーはすでに冬のよそお
いで登山靴だけでは足が出ないの
で、来年に備えて空中査察(?)を
試みてみました。それも狼の出ない
単独行の容易な所と考えて、テ
ヘランより南下し、イスハン、シ
ラズと飛んでみました。
イラクとの国境沿い、ペルシャ

湾北岸沿いに四、五〇〇メートル
を越す峠を持つ山脈が続き、峯
には十一月下旬真白いものが見え
ていました。天然林はなく、すべ
て裸の山、谷はあるが流水は見ら
れないので、登るとすれば積雪期
に限定されると思われる。住民の
治安は非常に良い様に思われる。
特に日本人には良い様です。

一つには私達の顔が、此の国の
技術的發展に重要な役割を果して
いるトルコ人によく似ている故か
も知れない。エルブーの山村に
行っても子供達はジャボンジャボ
ンと言って親しげに寄って来る
し、イラクとの国境の街に行っ
ても少数異民族が吾々に寄って来る
始末です。更に此の国境の街で泊
ったイラン軍の将校クラブでは給
仕の兵隊の顔が日本人とそっくり
が、思わず日本語が出そうなのを
がまんして怪しいペルシャ語で
くんとトルコ人だとの事でした。此
の国の山地住民の主食はヒマラヤ
山地民と同じく、小麦粉を水で練
ったものを伸ばして焼いたもので、
山羊乳のチーズを此れに巻いて
食べると極めて簡便である。

ペルシャ帝国の古都イスハンの
西方一五〇KM、アバダンへ越す
中間に標高四、五〇〇メートルの
石灰岩を主とする明るい山脈があ
る。此れなら軽装単独行も可能な
様である。附近には四、〇〇〇メ
ートル以上の峯が沢山は。来年
はチャンスをつかんで積雪期の涼
しい時期には是非登山を試みたい
と思っています。

(イランタレガンの開発計画調査団
査員 北海通商勤務)



カブト・佐藤 久一朗

一月理事・評議員会

十日・ルーム

出席者松方会長、理事折井、山
崎、辰沼、川上、中島、金坂、徳
久、高橋、田村、竹田、古沢、監
事野口、松本、評議員藤島、日高
神谷、青木、石原東京支部長、高
山信濃支部長、牧野静岡支部長、
マ委任出席三田、村木、成瀬、望
月、伊藤(秀)

マ議事と報告

①フランスよりオリンピック施設
調査団として来日したモーリス・
エルゾーク氏と会談 (日高)

・本会より松方、榎、日高三名が
フランス大使館のレセプションに
招かれ懇談した(4頁記事参照)

②北アルプスにおける今年の冬山
遭難に救出の救助隊の問題(高山)
・今後救助隊に対する装備、技術
等の指導を考える必要がある。

・県としても百万円くらいの保険
加入を考えている。(救助隊とし
て加入する)

・救助隊の訓練、指導等には日本
山岳会が援助していただきたい。

③文部省主催冬山講習会(妙高)
について (徳久)

・十二月、本会より徳久・田村両
名出席。

・文部省としては、学校の先生と
地方のリーダーの育成を考え、明
(38)年度は文部省独自の考えに
より、講習会を、夏季は学校の先
生を主体として二回行ない、冬季
は一回、地方の指導者層を含めて
行なう予定。

③現地小集会について (高山・川上)
・一月二十日の信濃支部総会にお
いて承認を得たうえ、本年度は信
濃支部に主催をお願いしたい。

・開催期日、三月上旬、場所白雪
温泉を予定。

二月理事・評議員会

七日・ルーム

出席者松方会長、渡辺副会長、
理事折井、山崎、辰沼、中島、川
上、徳久、金坂、高橋、田辺、田
村、古沢、監事野口、松本、評議
員日高、小原、藤島、神谷、深田

青木、織内、石原東京支部長、須
賀東海支部長、芳野東京支部委員
委任出席村木、望月、今西(錦)
高山。

マ議事と報告

①大学山岳部のあり方と指導につ
いて (金坂)

橋本龍伍君を悼む

日 高 信 六 郎

会員の橋本君が病気で引込んでいられると聞いて、一度お見舞いにとお慰めをうけるうちに、その訃報がとどいた。一昨年のウェストン祭で元気な姿を見たり、楽しい山話を交わしたりしたことなどを、今さらのように思い起して、君のようなかけがえのない山仲間の世界を悼むのである。

中学のころの長わづらいで不自由になったかた脚をもちながら、すぐれた頭脳と勝ち気なたちを存分にはたかせ、優れた学業をとり戻し、優秀な成績で大学を出て官界に入り、昭和の激動期に若手の役人として縦横に活躍し、戦後政界に出では厚相、文相を歴任し政治に新風を吹きこんだ新人として名をあらわしたが、近ごろますます円熟して行かれるのを見て、ふるくからの友人として、その健在を祝福すると共にその将来に大きな期待をよせていたのである。

それにも増して心を打たれるのは、君があのかただで山登りをはじめ、学生時代には松葉杖に石突きをつけて、相当むつかしい山にのぼり、役人になっても大臣になっても、運動をつづけ山登りをやめず、夫人といっしょに、日課のように神宮プールで泳いだり、家族づれで二本の杖をつき日本アルプスやおちの山々に足をのばすという、シンからの運動好き山好きであり、全国民ことに青少年を野外活動や正しい登山に向わせるため、熱情を傾けていられたことである。

数年前から毎夏催される「自然に親しむ運動」とその一環をなす「国立公園大会」は君が厚生大臣時代の構想に基くもので、それが実現された最初の大会が昭和三十四年七月奥日光戦場ヶ原で開かれたとき、君は既に大臣の地位を去っておられたが、夫人ともども参加され、君は中宮祠から舊浦ヶ浜まで行動隊と共に歩き、夫人は隊列に入って式に参加し、天幕に夜を過ぎた。われわれのヒマラヤ遠征のときには文部大臣として格別の厚意を示されたおかげで、多大の便宜を得たことも忘れられない。

国立競技場の秩父宮記念スポーツ博物館開館式では文部大臣として挨拶して、婦人の来会者が少ないことを指摘し、今日スポーツ界における婦人の進出にくらべて、体協や日本山岳会など運動競技団体に婦人役員が少ないことを批判したり、ウェストン祭に夫人令息と参加されたときには、身体障害者を克服して今日まで登山をつづける体験を談じて、若い人たちに適切な助言と力つよい激励のことばを与えられたことなど、深く記憶に残っている。

前述ある政治家であると同時にいい登山家であり、よき会員であった君をいま失ってまことに淋しい。心から君の逝去をいたみ、ご

遺族に深い弔意を表すると共に、わが会員として、しばしば御主人といっしょに、時にはお一人で、会の行事や山行に加わられた夫人や、ご両親に似て山好きのお子様方が、今後ますますお元気で山に親しみ、橋本君の足跡に続いて行かれることを祈って止まない。

橋本龍伍君

明治三十九年六月二日生、大正九年東大法学部卒業、昭和三十一年八月日本山岳会入会、(会員番号四三三七)昭和三十七年十一月二十一日逝去

山に関するアンケート集

日本山岳会静岡県支部編

この小冊子は静岡県支部が、県内各界の知名人一八五名について求めた回答を集録したもの。

はじめに、「もし貴方の御子弟御息女が山の愛好者であったとしたならば或は登山された場合、貴方はその方々にどんなことを希望なさるでしょうか個人的お立場に於てお聞かせ下さい」とあり、回答様式、――

①私はこんなことを希望する。注意を与える。
②あなたご自身「山」は好き、嫌い、無関心。以上について答を求めているが、「山は無関心」と答えた人二名、「山は嫌い」と答えた人一名で他はのこらず「山は好き」と答えている。
「山は嫌い」と答えた人は、近親に遭難者を出したからとことであるが、全般的に無難な登山を戒める言葉が多い。

山の事故が相つき、世の関心の高まっている折から聞くべき意見が多い。
(37年2月、タイプ印書、27頁)

・文部省スポーツ課松島体育官より、本会学生部に連絡あり、金坂高橋、田辺が出席。

・一月二十八日文部省第六会議室にて大学山岳部のあり方について懇談会あり、本会より日高、小原、谷口、吉沢、木下、金坂、山崎、日下田、高橋、川上、田辺、山野井、文部省側より前田体育局長、松島体育官その他が出席意見を交換、現段階においては、まず各大学山岳部の実情を調査することに意見がまとまる。

②愛知大学山岳部(北ア薬師岳、1月2日)および南山大学山岳部(西穂高、1月9日)の遭難について (須賀)

③「山岳」第57年号刊行について本年度内に発行できる予定。 (折井)

④大韓山岳連盟より訪日の希望について連絡あり。 (折井)

⑤三月上旬来日予定
⑥37年度国際スポーツ行事用外貨の割当について

・同志社大(サイパル)
・大阪市大(ランタン・リルン)
・神戸大(ポリビア、アマゾンの源流)に割当決定をみた。

⑦東京農大東部ネパール遠征について (織内)
⑧学術調査の目的で三月上旬出発
⑨東海大ネパール、カルリナ遠征

について

・学術調査の目的で三月上旬出発

◇第二三三回小集会

―現地小集会―

- ・期日 三月二―三日
- ・場所 乗鞍・白骨温泉、新宅旅館
- ・費用 温泉一泊、千円
- ・携行品 スキーその他
- ・名物桜肉・そば
- ・担当、信濃支部

山日記(一九六三年版)

日本山岳会編

昭和38年度山日記が刊行された。昭和5年創刊いらい今年で第28集となった。内容・装釘・造本のすべてに年輪を重ねた風格ともいふべきものが定まったようである。日記欄には登山年表が併記され、スペースも広くなつて記入に便利になった。本文二二四頁、「山に登る人々のために」以下の十六項目は、今年も書き下して、高山植物図は色刷となった。(昭和三十八年一月一日茗溪堂発行、定価三百円)

・お願い

会費未納の方は至急お払込下さい

第 1 回 氷雪技術講習会

日本山岳会

東京支部

▽日時、昭和37年11月30日

12月2日

▽場所、富士山(北口)五合

△趣旨▽

今年から東京支部で支部会員諸氏に、本会の登山技術研究委員会によって研究され、統一された正しい技術を身につけ、安全に冬山に登っていただくことを目的として氷雪技術講習会を開催することになった。

△受講者氏名▽

小川好敏、原 雄二郎、瀧尾絃一郎、小市 猛、石崎義規、大橋義男、嵯峨六郎、市川貴代子、三上雅子、奥津のり子、古川晶子、名越礼子、芳野菊子、黒沢康子、渡辺 博、松本健治、小糸俊介、福森康一、金井武夫、大河内孝志、山岸弘一、福田俊夫、松原貴代司、須田信弘、鈴木 昭、鈴木敏子、小寺且訓、岡野谷 誠、松平直寿、本間純一(以上三十名)

△編 成▽

○本部 チーフ・リーダー 折井 健一
サブ・リーダー サブ・リーダー 山崎 安治
兼技術リーダー マネジャー 芳野 越夫

サブ・マネジャー 関口 周也
サブ・技術リーダー 村木潤次郎

川上 隆 石島 襄二

田村 扇一

講師 深瀬一男、芳野利夫、篠原敏弘、村

木潤次郎、中沢公正、土肥正毅、石

島襄二、鈴木伊和雄、川上 隆、宇

田川充敏

○係 会計係 錦織保清、岩佐吉雄

装備係 宇田川充敏、篠原敏弘

食糧係 中 保、山口節子、富田

美知子

連絡係 野萩 守

記録係 鈴木郭之

○山梨支部 成沢正通、今沢 寛、日本 伸、駒

井 広、君島久登

○毎日新聞写真部 木村 勝久

○毎日新聞甲府支局 山内 巖

△行動概要▽

十一月二十日 準備会、一八、〇〇

よりルムにて、隊編成の発表、折井

チーフ・リーダーの主旨説明、山崎サ

ブ・リーダーより計画発表、講習内容

についての説明、金坂一郎氏より富士

山の積雪、雪崩 気象、突風について

の注意、その他。

十一月三十日 二二、三〇ルム集

合、バス乗車。二三、三〇休協前出発

十二月一日(晴)五、四〇、吉田口馬

返着、降雪多く予定より一時間四〇分

のおくれ。六、〇〇馬返着、九、〇〇

芙蓉荘着、一一、〇〇講習開始、全員

小御岳上御中道直上の斜面にてキック

ステップ、滑落停止の練習、一四、四

〇頃よりアイゼン歩行の練習、一六、

〇〇講習終了芙蓉荘へ帰着、夕食後全
員にて反省および討論、(一八、三〇
〜二〇、三〇)

十二月二日(風雪)

五、〇〇起床、七、〇〇講習開始、

講習場所前日に同じ、前日講習の結果

特に基礎技術の不足が痛感されたので

アイゼンを使用せず、終日キックステ

ップにて歩くことにする。講習科目、

制動確保、コンティニュースの場合の

確保(七、〇〇〜一〇、四〇)前日と打

って変った吹雪となり、湿雪のため、

全員が濡れ始めたので、一一、〇〇講

習終了、芙蓉荘帰着、昼食後、海外遠

征した講師達の経験談、氷雪技術に関

する討論の後、一四、〇〇芙蓉荘発、

一六、〇〇馬返着、一六、五〇同所発

予定よりおくれ二三、〇〇休協前帰着

解散。

講 評

芳野 越夫

今回の講習会は、東京支部の会
員、団体会員、会員紹介者を対象
とした内輪の講習会であったが、

冬山の厳しさを認識し、登山に於

けるリーダーシップ、完全なメン

バーシップを身につける事に主眼

を置き、出発より帰着までの行動

のすべてを訓練の対象とした。

しかし、受講者諸氏は全員此の

主旨を認識して真面目に行動され

非常に規則正しい模範的なメンバ

ーシップを保持し、本講習会をし

て、所期の目的を達成し成功に導

き得たことは喜びにたえないとい

ろである。

特に往路の未明、積雪のためバ
スの乗りかえ等、予定変更を予儀
なくされた時、全員協力してその
事態に対処できたこと等が、それ
を如実に物語っている。

次に講習日数について反省して

見ると、今回は会員を対象とした

ため講習日数を週末の二日間にと

ったが、会員間の懇親的な要素も

含まれることを考慮すると、もう

一日あればチームワークが今回以

上に向上され、また基礎技術の訓

練時間も充分にとれたと考えられ

今後、このような会を持つ際の参

考となった。

技術面について見ると、第一に
多くの講習生諸氏が、応用的な技
術について非常に興味を持ち、一
応こなしている反面、それを支え
る基礎技術についての認識が不充
分であることを痛感した。

冬山を志すものにとって、最も
重要なことは冬山の基礎技術を確
実に身につけ、どんな事態に立至
っても安全確実に行動できること
である。

今日の一般の風潮はややもする
と足元の精進を忘れ、いたずらに
すぐ目的に達し得るような応用技
術の習得に走るきらいがあり、そ
れが現在の多発する遭難の根本原
因になっているのではなからうか
このことは単に技術だけに限ら
れず、登山における精神面の精進
についても同じことが云えよう。

東京支部報告

十二月五日(水) 役員会

一、富士氷雪技術講習会の反省

二、十二月第三水例会クリスマス

の集いの件

三、一月第三水例会の件

四、一月役員会の件

出席者

折井 錦織、坂倉、芳野、野萩、中

篠原、関口、岩佐、山口、富田

×

富士山第一回氷雪技術講習会開

催に関する役員会

十月二十六日、十一月九日、十

六日、二十六日

富士山第一回氷雪技術講習会に

関する講師及び役員の反省会

・十二月十一日

出席者

折井 川上 村木 山崎 木村

石島 田村 中沢 深瀬 土肥

石原 錦織 芳野 中 篠原

関口 岩佐 鈴木(敦) 山口 富田

一月九日(水) 役員会

一、一月第三水例会開催日の変更

の件

二、二月第三水例会議題の件

三、現地小集会開催の件

四、三十八年度事業計画の件

五、一月十三日〜十五日スキース

クルの準備

・出席者

折井 坂倉 中 岩佐 関口 鈴木

三枝 富田 山口 九名

今回の講習会はこのような見地にたち、基礎技術訓練の習得を一貫したことは、当然の事ではあるが時宜を得た企てであったと思う現地における反省会の討議のさいも、講習生諸兄の中に基礎の重要さを認識された声が多かったことは喜ばしいことであつた。

東京支部としては、今回の経験を生かし、今後時季を問わず、今回のように基礎に重点をおいた講習会を開き、単に技術の押売りでなく、広く歩いてその時、その場で実際に即した技術を訓練し、何回も講習を受けながら、会員諸兄に楽しい雰囲気の中で自然のうちに基礎を積み重ねることができるよう、努めるつもりである。

★第八回スキー講習会

毎年一月に行われている東京支部主催のスキー講習会も本年で第八回を迎え去る一月十三日から三日間長野県山田温泉スキー場で開催されました。

今回の受講生は八十二名で、本会々員、家族の方、お友達の方々と、特に女性の参加者が目立って多いのに驚きました。年々女性スキーヤーが多くなっているのが反映してのことだと思えます。

一月十二日の夜十時に貸切バス二台に分乗して休協前を出発し、十六日早朝に全員無事に帰京しましたが、往路途中でバス一台が故障し、山田温泉到着が予定より三時間程度遅れて了ったことは残念でした。

講習は、初心者のためのDクラ

ス・2、多少の経験者のためのCクラス・3、中級者のためのBクラス・3、上級者のためのAクラス・1、合計9クラスを設け、初心者はスキーの着脱から、上級者は高級なパラレルクリスチャンニアに至る内容で十分の練習を積みました。

本講習会はスキー技術の向上もさることながら、肩の凝らない和気あいあいの雰囲気の中でスキーを楽しむことを目的としていますので、このために第二日日夜に宿行ったミーティングは大いに有意義なものであったと思います。

山田温泉スキー場は、例年ならば、あまり積雪の多くないところですが、今年は一米余りの積雪でコンディション上々、その上三日間とも午前中は雲量ゼロという快晴に恵まれて講習は予想外に進捗し予期以上の成果を挙げることが出来ました。

今回の講習会には、本会々員、中保、西川益生、鈴木郭之、加藤元一、篠原敏弘、山口節子の諸氏と全日本スキー連盟公認指導員加藤一二氏、同大久保富美子女史、日綿実業Kスキー部技井俊夫の各氏に貴重な時間を割いて参加して頂き講師と役員の任に当って頂きました。

以上のように今回の講習会は、往路バスの故障があつたにせよ、上天気にも恵まれて、一人の事故者もなく、整然とした行動の下に所期の目的を遂行することが出来て大成功だったと信じております。

係、安彦六郎・関口周也
(関口 記)

二月六日(水) 役員会

- 一、スキースクール報告
- 二、二月第三水例会の件
- 三、三十八年度事業計画
- 四、三月現地小集会の件
- 五、三十八年度役員の件

・出席者

折井、安彦、坂倉、錦織、芳野、中関口、岩佐、鈴木、野萩、三枝、山口、富田 以上

二二三号訂正

13頁 近畿外山岳会誌紹介

⑨ Mitteilungen des Deutschen
× Aug. 1961
Mitteilungen des Deutschen
× Jan. 1962

以上 Alpenvereins が脱落していた

した

・二二四号訂正

9頁 「この一展、展示書目」

誤 正

小島鳥水 小島鳥水
鳥水俳句入り 鳥水俳句入り

おことわり

・回想の岳人(統) } 紙面の都合により掲載を次号に繰延べます
・沼井鉄太郎遺稿(統)

昭和三十八年二月二十五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

頒価二十円 電話神田(四)八九五二番
振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂南池五番地

印刷所 株式会社 技報堂